

編集後記

今年もこうしてミクストミューズ第12号をお届けすることができるのは喜ばしい。特に今号は昨年9月、音楽学コース主催により本学で開催された国際シンポジウム「異文化へのまなざし」の報告文を含めた、本誌としては量的に最大規模、そして執筆者の顔ぶれ、内容の多彩さの点でも従来を凌駕するものになった。僥越ながら本コースの活動領域の拡大とその成果が反映されていると自負したい。前半のシンポジウム報告書の部分にはフランス、台湾、イタリアの碩学による興味深いテーマの音楽・美術研究の論稿が収められ、後半は通常の本誌の内容で構成されている。今年度の学位論文（博論、修論、卒論）は全体に堅実なレベルを維持しているだけでなく佳作、秀作も見られたので、それらを含め本誌の収録内容のすべてが今後、ネットで拡散されることを期待している。

昨年のシンポジウムで披露された Battier 先生、Menegazzo 先生、蔡先生の優れた研究内容を、本誌を通して学内外に提供できることは光栄且つ至上の喜びである。そして、本学の美術学部（芸術学）の高梨先生、本田先生をはじめ、音楽学部からは作曲の成本先生、声楽の高木先生、ピアノの白石先生からも玉稿を賜ったことに感謝を申し上げる。

編集では修士2年の山本君（編集長）、畑さんを中心に編集初参加で学部2年の河村さん、永井さん、学部1年の伊藤さん、岡さんの協力を得て刊行にこぎつけた。お疲れ様でした。また、シンポジウムスタッフの要としてだけでなく執筆、さらには編集にもかかわったいただいた森本先生、深堀先生、七條先生にも感謝の意を表したい。最後にいつもながら貴重な表紙デザインを提供してくださった小林英樹先生へ深謝申し上げる。K.M.

私たちシンポジウム事務局スタッフは、シンポジウムの立ち上げ、開催準備、運営、そしてこのミクスト・ミューズ特別号（シンポジウム報告書）の作成に、2年以上にわたって携わってきました。その道のりは決して平坦ではありませんでしたが、この報告書の刊行をもって一連の仕事を終えた今、感慨とともに一抹の寂しさを覚えています。報告書の作成にあたっては、息切れ気味の私たちシンポジウム事務局スタッフに代わって、山本くんを中心とする学生の「実働部隊」が大いに力を発揮してくださいました。本当にありがとうございました。本学のさらなる発展と、近い将来（?）、ふたたび同様の催しが行われることを願っています！ Y.M. / A.F. / M.S.

今号はかつてない大規模なものとなりましたが、こうして無事に刊行に至りましたことを大変喜ばしく存じます。50周年という節目に、特別号の編集長を担当させていただき、非常に貴重な経験をすることができました。ご寄稿くださった先生方、シンポジウムスタッフの皆様、そして編集委員の仲間たちに、心より感謝申し上げます。M.Y.

ミクストミュージズにご寄稿下さった執筆者の皆様、どうもありがとうございます。今年度は50周年シンポジウム特別号となり例年よりも大変な編集作業となりましたが、シンポジウムスタッフの皆様、山本編集長はじめ編集委員の皆様のおかげで無事刊行できましたことを大変嬉しく思います。Y.H.

50周年ということもあり、いつもより盛りだくさんなミクストミュージズの編集作業に関わることができて光栄に思います。執筆者の皆様、そして例年より大変な編集作業を取りしきってくださった山本先輩、ありがとうございました。A.N.

この度、初めてミクストミュージズの編集に携わせていただきました。慣れない作業の連続で心が折れそうになることもありましたが、先輩方や仲間の助けもあり、無事に刊行できることを喜ばしく思います。時間の限られている中、迅速な対応をしてくださった執筆者の皆様、全ての関係者の皆様に心より感謝申し上げます。R.K.

今回、初めてミクストミュージズの編集に関わらせていただきましたが、先輩方の厚いサポートのおかげで無事に作業を終えることができました。ご寄稿くださった執筆者の皆様にも、心より感謝申し上げます。ありがとうございました。M.I.

この度、初めてミクストミュージズの編集に携わせていただきました。特別号という記念すべき号に関わらせていただいたことを非常に喜ばしく思います。不安もありましたが、編集長の山本先輩をはじめ、関係者の皆様のおかげで無事に刊行することができました。この場をお借りしてお礼申し上げます。N.O.